

<研究ノート>「白・白い・白々・白々しい」の意味 拡張及び認知プロセスについて

著者	陳 祥
雑誌名	国際日本研究
巻	12
ページ	198-207
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.15068/00159745

研究ノート

「白・白い・白々・白々しい」の意味拡張

及び認知プロセスについて

Semantic Extension and Cognitive Process of “Shiro”, “Shiroi”, “Shirajira”, and “Shirajirashii”

陳 祥 (Hsiang CHEN)

筑波大学大学院人文社会科学研究所 博士後期課程

日本語には、同一の語形や語句・語基などを繰り返し用いる表現があり、これらは「反復表現」と呼ばれている。本稿では、「反復表現」は「食べれば食べるほど太る」のような「文法的反復表現」と「山々」、「苦々しい」のような「語彙的反復表現」に分けて論述する。「語彙的反復表現」は「文法的反復表現」に比べ、生産性が低く、パターン化された意味特徴を抽出することが困難である。一方、「文法的反復表現」は文法化されているがゆえに、他の語句に置き換えるだけで説明可能である。それゆえ、本稿では「文法的反復表現」に関しては取り扱わないこととする。

「疊語」あるいは「反復形容詞」は、本稿の分類では「語彙的反復表現」に分類される。そして、それらに関する先行研究では、語基との比較を通じ、意味が大きく関わっていることが指摘されている(禹 2015, 飯田 2005 など)。また、禹(2015)は、「若々しい」、「黒々」、「深々」などの意味は、話者の「事物の様子や在り方」に対する「様態の強調の現れ」であると述べている。しかし、実際には、「様態の強調の現れ」がなされない「夜が白々と明けてきた。」のような用例は存在する。

ゆえに、本稿では視覚から入った事物の外見を描写する典型的な表現として「色彩語」を対象として、疊語「白々」と反復形容詞「白々しい」と同じ語基を持つ「白」、「白い」を考察対象とする。研究方法として、『筑波ウェブコーパス』から用例を取り上げ、山梨(2000)が主張した理論を基盤として、視覚の客観的叙述から主観的な叙述への意味拡張がどのように行われているのかを明らかにし、語基との関連性の説明を試みる。最後には、「疊語」と「反復形容詞」の新たな視点から意味拡張の解釈を提案する。

In Japanese, we use the same word forms, phrases, word based on reduplication, and these are called "repeated performance". In this paper, "repeated performance" can be divided into "repeated performance of grammar" "Tabereba taberu ho do futoru" and "repeated performance of vocabulary" such as "Yamayama" and "Niganigashi". "repeated performance of vocabulary" is lower in productivity than "repeated performance of grammar" and it is more difficult to extract the meaning.

Previous research on "reduplication word" or "repetitive adjectives" has pointed out that meaning is largely related through comparison with the original word(Woo,2015; Iida2005;etc).In addition, Woo (2015) states that the meaning of "Wakawakashi", "Kurokuro", "Fukabuka" is "appearance of the way of exitance of the aspect" to the "emphasis on the appearance of the aspect" of the speaker. However, in practice, there is an example of "the night has come to light" that "emphasis on the appearance of the aspect" does not represent.

In this paper, we use "color words" as a typical expression to describe the appearance of things entered from the sight, and the original word "Shiro" has the same base as the reduplication word "Shirajira" and the repetitive adjective " Shirajira shi", "Shirajira" is considered. Taking an example from the "Tsukuba Web Corpus", it is clarified how the process of extending from the narrative of the five senses claimed by Yamanashi

(2000) to the function of declaring the world involved in the subjective recognition and judgment of the subject is performed. Then try to explain the relationship with the original word. Finally, we propose the interpretation of semantic extensions from the new viewpoints of "reduplication word" and "repetitive adjectives".

キーワード：反復表現 色彩語 共感覚表現 意味拡張 認知プロセス

Keywords: Repetition, Color Words, Synesthetic Expressions, Semantic Extension, Cognitive Process

はじめに

日本語には、同一の語形や語句・同格の類似語句などを繰り返し用いて、ある種の効果をねらう「反復表現」がある¹。これまで厳密な定義がなされてこなかったため、研究者によって「反復表現」についての認識の違いが見られる。本稿では、広い範囲では句・文などを繰り返すことを「文法的反復表現」と呼ぶことにする。一方、狭い範囲では語レベルにおいて、同じ語基²、語を繰り返すことを「語彙的反復表現」と呼ぶことにする。以下に具体的な例を挙げる。

- (1) 食べれば食べるほど太る
- (2) 山々、苦々しい

(1)の「食べれば食べるほど太る」は「...ば...ほど」という文構造を使い、「私は、食べるとそれに比例して、更に太ってしまう。」というように<比例変化>を表す。「...ば...ほど」という文型においては他の語・品詞に取り替えることができるため、「文法的反復表現」であると考えられる³。

一方、(2)の「山々」は「XX」の疊語構造、「苦々しい」は「XXしい」の反復形容詞という構造を持っている。(2)の疊語と反復形容詞の構造において、「山々」が使われているが、「海々」の使用は管見の限りでは使用例がない。また、「苦々しい」に関しても対義である「甘々しい」は使用されない。両者を比べると(2)は(1)に比べると生産性が低い。また、(2)の意味に関し、例えば、「遠くには山々が連なっている」における「山々」は「多くの山」という意味で使われている。語基である「山」は単数を表すが、秋元(2005)が述べている、【名詞+名詞】という構成パターンを持つことで、<多数性>を表すこととなる。そしてこれは、単純な数の増加を表すのではなく、【名詞】の程度が著しく増加することを示すのである。さらに、語基「山」から拡張した【名詞+名詞】という構成パターンを持つ疊語の意味<多数性>から「豊かな自然に恵まれた伊豆の山々の景色である。」のような文が見られる。

これまで形態または意味の視点から(1)と(2)の違いを見てきた。本稿では、反復による意味がどのように拡張するかを考察するため、(2)のように意味が語基と関わる表現を中心に考察を行う。

禹(2015)の研究は「語彙的反復表現」を対象とする。禹(2015)は、「若々しい」、「黒々」、「深々」などの意味は、話者の「事物の様子や在り方」に対する「様態の強調の現れ」である⁴と述べている。しかし、コーパスの用例を見ると、「事物の様子や在り方」を描写する表現で使われている「疊語」と「反復形容詞」は元の語とは使用方法が異なる。

- (3)a. 舟の下にある仄暗い水のゆらめきや萍の根の白々としたかそけき揺れが見えるようだ。(NLT)
- b. 舟の下にある仄暗い水のゆらめきや萍の根の非常に白いかそけき揺れが見えるようだ。(作例)
- (4)a. やがて鶏が鳴き始め、夜が白々と明けてきました。(NLT)
- b. *やがて鶏が鳴き始め、夜が非常に白く明けてきました。(作例)
- (5)a. 血色も良く見えて、若々しい印象になります。(NLT)
- b. 血色も良く見えて、非常に若い印象になります。(作例)

¹ 『日本語表現・文型事典』(2002:319)からの引用である。

² 本稿では、田村(2006)の定義に従い、論を進めていく。田村(2006:19)によれば、語基とは共時的観点から見て語の意味的語幹になるもので、例えば「汗ばむ」、「か弱い」、「お酒」の下線部が語基である。「疊語形容詞」とは、同じ語基を重ねたものに接辞「しい」が付加されたものである。例えば、形容詞の語幹を重ねたもの(荒々しい、痛々しい)、名詞を重ねたもの(刺々しい、華々しい)などである(田村 2006:18)。

³ 例えば、「考えれば考えるほど」、「大きければ大きいほど」、「簡単であれば、簡単であるほど」などのように、入れ替えて使われている。

⁴ 例えば、「髪は薄くなりかけているが、顔立ちは若々しい。」である(禹 2015:35)。

- (6)a. 素晴らしい俳優さん達の若々しい演技も印象深いです。 (NLT)
b. *素晴らしい俳優さん達の非常に若い演技も印象深いです。 (作例)

(3)~(6)は視覚を通じ、ある物の様子、状態がどのように見えるかを描写する表現である。(3)「白々」は「非常に白い」に、(5)「若々しい」は「若い」に置き換え可能であり、「様態」の強調の現れの意味として使える。一方、(4)「白々」と(6)「若々しい」は強調する元の語「非常に白い」、「非常に若い」に置き換えられない。「事物の様子や在り方」を描写する表現で使われている(3)~(6)の中で、「白々」と「若々しい」は語基との使い分けがある。「視覚を通ず様態描写の強調」を表す「疊語」と「反復形容詞」は、視覚による意味の拡張が行われ、語基との相違が生じると考える。本稿では、視覚から入った事物の外見を描写する典型的な表現である「色彩語」を対象として、疊語「白々」と反復形容詞「白々しい」と同じ語基を持つ語「白」、「白い」を考察対象とする。

上で述べた先行研究では、語基との使用方法が異なるような視覚による意味拡張に関する言及が十分ではない。そのため、本稿では「語彙的反復表現」に対し、新たなアプローチを提案する。

山梨(2000)では、以下のように外界認知に関わる身体感覚や五感は、日常言語の意味として重要な役割を有していることを説明している。

外界認知を通して得られる情報のかなりの部分は、味覚、触覚、視覚をはじめとする五感に依存している。日常言語のなかには、この種の五感のモードが、人間の内面描写の叙述に比喩的に使われている例がひろくみられる。

(山梨 2000 : 126)

本稿では、視覚から入った事物の外見を描写する典型的な表現である「色彩語」を対象として、その中で疊語「白々」と反復形容詞「白々しい」と同じ語基を持つ「白」、「白い」を考察対象とする。『筑波ウェブコーパス』(Tsukuba Web Corpus: TWC)から用例を取り上げ、山梨(2000)が主張した五感の叙述から主体の主観的な認識や判断にかかわる世界を叙述する機能にまで拡張されているプロセスはどのように行われているのかを明らかにし、語基との使い分けの説明を試みる。最後には、「疊語」と「反復形容詞」の新たな視点から意味拡張の解釈を提案する。

1. 先行研究

従来の研究において、反復による「疊語」と「反復形容詞」が形態的、意味的にどのように記述されてきたかを概観する。まずは「疊語」に関する先行研究(秋元 2005、石井 2007、禹 2015、石川 2017)を取り上げ、次に、「反復形容詞」に関する先行研究(飯田 2005、荒川 2006、田村 2006)を取り上げて論じる。

(1-1) 疊語

疊語の研究は、主に品詞の違いによって疊語の意味が決まるとする立場と、特定の品詞に限定せず疊語の意味を文脈で捉える立場に分けられる。前者は、秋元(2005)や石井(2007)が論じ、後者は禹(2015)と石川(2017)の研究が挙げられる。

本稿の研究対象である「白々」の意味は、名詞「白」または形容詞「白い」から拡張したため、後者の立場で捉える。以下では、禹(2015)と石川(2017)の分析を見たい。

禹(2015)は、空間的存在として特徴づけられる<モノ>と時間的存在として特徴づけられる<コト>という2つの概念として捉え、疊語の機能を<複数>、<反復>、<強調>という3つに絞り、分析を行った。

その3つの疊語機能以外に、石川(2017)は個々の用例に即して文脈的判断を行い、疊語を<(事物の)複

数性⁵>、<(複数事象の)反復・継続・頻発性⁶>、<(複数事物中の)個別性⁷>、<状況の強調・程度の増加⁸>、<語調調整⁹>の5つに絞り、分析を行った。

上記の先行研究から、石川(2017)が指摘しているように、品詞成分に限定しない方が、疊語の意味をより詳細に説明することが可能となる。しかし、(7)のように「白々」の意味が説明しにくいものがあった。

(7)見終わってしらじらとした気分になった。

(NLT)

(7)では、視覚に関する意味ではなく、人間の内面描写の叙述に比喩的に使われている。また、『デジタル大辞泉』から「白々」は人間の感情、感覚を表す意味があると考えられる。『デジタル大辞泉』では、「白々」の意味は「平気でしらばくれたり、見え透いたことを言ったりするさま。」と「興ざめなさま。」などが挙げられている。具体的な例は「白々と言ひ訳をする。」「慇懃無礼な扱いに白々とした気持ちになる。」である。

この場合は「白々」は思考・感覚動詞「感じる」と共起し、より抽象的な意味に拡張されている。よって、山梨(2000)が主張した直接的な視覚から主体の主観的な認識や判断に関わる世界を記述する機能にまで、拡張されていることがわかる。このような意味拡張のプロセスを見ることで、視覚に基づく「白々」の意味変化を考察することが可能である。

(1-2) 反復形容詞

反復形容詞に関する先行研究は田村(2006)、荒川(2006)、飯田(2005)が挙げられる。

田村(2006)は、1つの語基に1つ以上の語彙あるいは接辞が結合してできた複合形容詞、派生形容詞、反復形容詞¹⁰を対象とし、その語構成と意味について考察を行った。語構成には、反復形容詞は複合形容詞や、派生形容詞とは異なる特徴を持ち、同一語基を重ねたものに接辞「しい」が付加されたものであると述べている。反復形容詞は形容詞の語幹を重ねたもの(荒々しい、痛々しい)、名詞を重ねたもの(刺々しい、華々しい)などがあり、いずれも話者の感覚を表しており、反復する前と比べると意味的分化が見られると述べている。

田村(2006)の研究を踏まえ、荒川(2006)もすべての反復形容詞¹¹には語基¹²の語が存在すると主張して

⁵ 「...自分も殺されるかもしれないと言っている人たちの痛みを、我々がどれだけ共有したのか。」文中における「我々」は地上の人間の(ほぼ)全部を指し示し、<(事物の)複数性>に分類されている(石川 2017:66)。

⁶ 「多くの人々と出会い、新しい知識を獲得し、さまざまな経験をして、日々、おとなへと近づいている。」文中における「日々」は「近づく」といった連続的変化を含意する動詞と共起し、全体として反復ないし連続の意味を示している。この場合は<(複数事象の)反復・継続・頻発性>に属する(石川 2017:67)。

⁷ 「...使用、廃棄・排出に関して必要な規制を行ってきました。#個々の化学物質について適正な規制的措施を講じていくことの重要性は...」文中における「個々」は明示されたいくつかの化学物質を個別的に指し示し、<(複数事物中の)個別性>の意味を表す(石川 2017:68)。

⁸ 「『東西南北』刊行で勢いを得た鉄幹は、その翌年一月には、早々と次の詩歌集『天地玄黄』を刊行。」文中における「早い」は状態の段階がさらに強められたもので、2冊目の詩歌集を刊行するのに通例想定される時期よりもなおさら早く刊行がなされたことを示す。この場合は<状況の強調・程度の増加>に分類されている(石川 2017:69)。

⁹ 「...柚子煉り1本 砂糖大さじ6~7卵黄(照り用) 少々。」文中における「少々」は一見、これらは「少し」という程度が増加した例と見えるが、「少々」とは「数量・程度がわずかなこと。少し(ばかり)。ちよっと」という意味とされている(『明鏡国語辞典』第2版からの引用)。この場合は<語調調整>という意味を表す(石川 2017:70)。

¹⁰ 田村(2006)では「疊語形容詞」という用語を用いている。

¹¹ 荒川(2006)では「重複形容詞」という用語を用いている。

¹² 荒川(2006)では「派生元」という用語を用いている。本稿では、特別な区別がない限り、同義の場合は「語基」という用語で統一して述べることにする。派生元の決定に当たっては、国語辞典に加えて吉田(2002)及び飛田・浅田(1999)を引用し、派生元の語は語根とはせず、単語として取り扱う(荒川 2006:72)。例えば、「白々しい」の派生元は「白」であり、「痛々しい」の派生元は「痛い」である(荒川 2006:72-73)。

いる。そして、反復形容詞の意味を<派生語基の中心義のみが感情形容詞の意味になっているもの¹³>、<派生語基の中心義・転義の双方が感情形容詞の意味になっているもの¹⁴>、<派生語基の転義のみが感情形容詞の意味になっているもの¹⁵>という3つのカテゴリーに分けている。

飯田(2005)によれば、反復形容詞¹⁶の意味は語基と関わっているが、構成要素からなる単純語形容詞の意味の強調表現というよりも、話し手による判断が優先される場合が多い。以下では、「若い」と「若々しい」を挙げ、意味の違いを説明する。

(8a)100歳であるケンは、{私にとっては/100歳の老人としては}若い。

b.100歳であるケンは、{私にとっては/100歳の老人としては}若々しい。

(飯田 2005 : 89)

(8a)は生物学的に人間の100歳が「若い」とは一般的に考えにくいいため、形容詞「若い」を使うと不自然な文になる。しかし、(8b)は私自身のなかで思い浮かべる、一般的なその類の(100歳前後の)人と比較した意味も含まれているため、「若々しい」は使える。よって、「若々しい」は「特定の相対基準(話し手の判断)」とともに、「一般的基準(比較の相手)」も内在している可能性が高いといえる。

しかし、日本語の形容詞はすべて測定可能な一般的な基準を持っているとはいえない、例えば「憎い」、「弱い」などのように、測定可能な一般的な基準を持たないと考えられるものもある。そうすると、「憎々しい」、「弱々しい」のような反復形容詞は飯田(2005)が主張している、話し手の判断の度合いによる説明では困難である。本稿の研究対象である「白々しい」も同様である。

(9)教員時代の変に充ち足りた一年間というものは、私の歴史の中で、私自身でないような、思いだすたびに嘘のような変に白々しい気持ちがするのである。(NLT)

日本語においては、話し手の内部の感覚・感情による表現では一人称が使えるが、その場合一人称主体文が一般的である。(9)では個人的な感覚・思いが含まれているが、「一般的基準(比較の相手)」という自分以外の他者の感覚・思いが含まれていることを保証できない。そのため、一般的な基準を持っていない「白々しい」のような反復形容詞は飯田(2005)の説明を用いても、説明しにくいことが分かった。

山梨(2000)は、このような意味拡張を通じて、日常言語の意味の世界を特徴づける(具象レベルから抽象レベルにいたる)様々な概念体系が作り上げられているとしている。本稿では、(9)のような抽象的でその意味が直接的に把握できない場合には、「白々しい」と共起する名詞に関して何らかの具体的なイメージを仮定し、このイメージを介して「白々しい」の理解を試みる。

2. 研究方法

1節で踏まえた先行研究から分かるように、「疊語」や「反復形容詞」には、五感をはじめ人間の感覚・判断などが含まれ、新たに主観的に意味づけられる。これには、「疊語」や「反復形容詞」の用法と強く関連していることがわかった。Hubel & Wiesel(1962)を援用すると、人間は感覚(五感)によって外界の事物や事象を知覚する。基本的に色や形は視覚で、音や声は聴覚で、食べ物の味は味覚で、匂いは嗅覚で、温度や圧力は触覚によって知覚する。例えば、「甘い食べ物」は人間が味覚(口)を通じ、食べ物の味が甘いと感じる表現である。形容詞「甘い」は味覚に限定せず、嗅覚を通す「甘い香り」、聴覚を通す「甘い声」などのような拡張用法がある。

これらの感覚に関わる表現の中に、五感のうち特に視覚に関わる叙述から主体の主観的な認識や判断に関わる世界を叙述する機能にまで拡張されている例が多く見られると山梨(2000:129)は述べている。

¹³ 例えば、「凛々しい」は「凛とした様子が感じられる、きりりとひきしまっていて勇ましい感じである」という意味を表す(荒川 2006:74)。

¹⁴ 例えば、「重々しい」は「何かが物理的に重い様子を感じさせる」意と共に「落ち着いた態度を感じさせる」「重苦しい様子」の意も併せ持つ(荒川 2006:75)。

¹⁵ 例えば、「軽々しい」は「何かが物理的に軽い様子を感じさせる」意はなく、「考えが浅い様子を感じさせる」「軽はずみな様子だ」の意しか持たない(荒川 2006:75)。

¹⁶ 飯田(2005)では「重複形容詞」という用語を用いている。また、飯田(2005)では、形容詞性構成要素からなる反復形容詞のみを対象とする。

- (10)富士山がみえる。 (山梨 2000 : 129)
 (11)彼は真面目そうにみえる。 (山梨 2000 : 129)

山梨(2000)によれば、感覚動詞の「みえる」は、(10)のように、外部世界の対象の文字通りの視覚表現として使われる。一方、(11)のように、主体の判断に関わる意味としても用いられる。

ただし、(11)が表せるのは外部世界の創造的な理解を可能とする人間の認知能力の五感に関わっているといえる。(山梨 1995:4)は、人間の創造的な理解には、次のような認知プロセスが関わっているとしている。(12a)の【A】は作り上げられた最初のイメージで、(12b)では、新たに【B】に拡張され、【A】は喪失し、【B】のみ残ることが(12c)に示されている。また、【A】や【B】といった記述は筆者によるものである。

- (12)a.ある対象に関し具体的なイメージを作り上げていくプロセス。【A】
 b.ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス。【A】 + 【B】
 c.ある対象のイメージを多角的な視点から取り組みかえていくプロセス。~~【A】~~+【B】
 (山梨 2000 : 140)

(12)の認知プロセスを用いると、初めに(12a)のプロセスとして視覚を通して「白」という語で言語化され、対象のイメージが作り上げられる。また次に、(12b)のプロセスとして、(12a)で作られたイメージは他の語と共起することによって、新たな意味に拡張していく。または、多角的な視点によって、(12c)で新たな意味に拡張していく。こうして主体が外界を知覚し、外界を理解していく認知のプロセスを介すことで、「白」、「白い」→「白々」→「白々しい」と拡張していく。これらの語は、それぞれの意味が結びついていくと同時に、意味用法が拡張していくと考えられる。

3. 考察

以下では、「白」と「白い」、そして「白々」と「白々しい」の順に考察を試みる。まず、「白」と「白い」、の意味を分析する。『日本国語大辞典 第二版』では、視覚による「白」と「白い」の意味記述は以下のように記述されている。

白：色の名。雪、塩などの色。あらゆる波長にわたる可視光線を一様に反射する物体を見て感じられる色。明るくて特別の色がないと感じられる状態。
 (『日本国語大辞典 第二版』 2000 : 488)

白い：白色である。雪の色である。
 (『日本国語大辞典 第二版』 2000 : 490)

『日本国語大辞典 第二版』では、「白」と「白い」は視覚を通じ、具体物の「雪」や「塩」などの色と描写されている。また、「白」は「明るくて特別の色がないと感じられる状態」を描写することができる。具体的に、視覚を通じて「白」の表現が文中においてどのような意味で表せるのか、また、どのようなイメージが作り上げられていくのか、単なる辞書の意味からでは分からない。

以下では、「白」と「白い」の意味用法を考察するため、コーパスの用例から得た「白」と「白い」を抽出し、分析を行う。視覚を通じて得られる「白」と「白い」に関する表現は基本的に外界の対象の外見からの色彩の情報が主である。そのため、本稿では、「白」と「白い」を描写する名詞の特徴ごとにグループに分け、取り上げる。

表1が示すように、描写する名詞は様々であり、白は「白ワイン、白猫、白背景…」などが挙げられる。一方、「白い」では「白い歯、白い雪、白い湯気…」などが挙げられる。それらの名詞は、「a.食品、b.動植物、c.道具、d.自然環境、e.気体、f.模様」のような具体物である。これらは視覚を通じ、物理的な対象の特徴としては、直接に把握される表現であると考えられる。以上の考察から、「白」と「白い」の「視覚」を通じた意味用法を表1のようにまとめる。

表1 「白」と「白い」の意味用法

視覚
a. 食品 (ex: 白ワイン、白砂糖、白い飯、白い歯…)
b. 動植物 (ex: 白猫、白薔薇、白い鳥、白い花…)
c. 道具 (ex: 白足袋、白封筒、白い杖、白い糸…)
d. 自然環境 (ex: 白い雪、白い山…)
e. 気体 (ex: 白い息、白い湯気…)
f. 模様 (ex: 白無地、白背景、白い斑点、白い矢印…)

次に、「夜が白々と明けてきた。」における「白々」の意味が「白」、「白い」の視覚からどのように拡張してきたかを分析する。まず、コーパスにおいて、「白々」の用例を抽出したところ、動詞と共起する表現が多く見られた。「白々+と+動詞」は最も多い71.7%であり、「白々+(と)+動詞」は3.8%、「白々+に+動詞」は1.3%であった。

(13)a. やがてその夜も白々と明け始め、隣の家から彼の助けをした隣の男の声が聞こえてくる。

(NLT)

b. やがて鶏が鳴き始め、夜が白々と明けてきました。 (NLT)

c. 夜の名残の星がまるで見守るように白々と輝いている。 (NLT)

(13)のように動詞と共起する場合、補助動詞である「-てはじめ」、「-てきた」、「-ている」を使う表現が多く見られる。(13a)は視覚を通じ、「少しずつ明るくなっていくさま」のように時間の開始を表す。(13b)は視覚を通じ、「朝日が昇る時にだんだん明るくなってきたさま」のように時間的に変化して行く意味を表す。(13c)は視覚を通じ、「星が空にきらきら光っている」のように時間的に持続する意味を持つようになった。よって、「白々」は視覚を通して時間軸を獲得し、目の前の状況・場面がどの段階にあるかという時間的アスペクト(開始、完了、継続)を表すことが可能である。

また、「白々」は名詞と共起する意味拡張も見られる。例えば、(14)と(15)の例を挙げ、説明してみる。

(14)a. カーテン越しに射し込む白々とした朝の光…。 (NLT)

b. コメだけでなく棚のすべての食料がからっぽになる白々とした光景を、ある種の緊張感とともに幻視することがある。 (NLT)

(15)a. 君はそのとき、白々とした無表情の顔をするのだよ。 (NLT)

b. しらじらとした沈黙が訪れた。 (NLT)

(14)と(15)はすべて視覚を通し、それぞれ異なる場面(具体的な状況から抽象的な状況へ)を描写し、「白々」の意味拡張が見られる。まず、(14)は視覚を通し、「朝の光」、「光景」を描写するが、「朝の光」、「光景」の色は<白>を表しつつ、<何もない>という意味も表せる。例えば、(14')のように入れ替えることが可能である。

(14')a. カーテン越しに射し込むもう夜ではない、いかにも白く見える朝の光…。 (作例)

b. コメだけでなく棚のすべての食料がからっぽになる何もない光景を、ある種の緊張感とともに幻視することがある。 (作例)

また、(15)は(14)に比べ、単なる目の前の状況を描写するのではなく、特定の状態にある人間の感覚対象のイメージをより強くする。つまり、(15)は<何もない>という具体的な描写場面を背景として、緊張などの感情のイメージを視覚可能な(人間の様子・行為)である「無表情の顔、気分」と共起させる。そして、「視覚から人間の外見描写へ」、「視覚から人間の内面描写へ」という意味拡張とみなすことが可能である。

以上の考察から、「白々」は主に「視覚」と「視覚から人間の外見描写・内面描写」を通じた意味拡張

が見られる。また、意味拡張の方向性について、「視覚」をはじめ、「視覚を背景化してから時間感覚へ」という認知プロセスが明らかになった。そして、「視覚と時間的変化を背景化してから人間の外見描写・内面描写へ」という認知プロセスが明らかになった(表2を参照)。

表2 「白々」の意味拡張及び認知プロセス

視覚 (目の前の場面/状況)	時間的な変化	人間の外見描写・内面描写
I 目の前の状況 (何もない) ex. 白々とした朝の光、白々とした光景、白々とした秋風の道。	II 視覚を背景化してから時間感覚へ ex. やがて鶏が鳴き始め、夜が白々と明けてきました。	III 特定の状態にある人間の感覚対象のイメージ (緊張、不安、失望、無関心など) ex. 白々とした顔、白々とした空虚感、白々とした気分。

上記の分析結果に基づき、はじめにのところで挙げた例文(4)に前後文脈を付け加えてみると、「白々」は視覚を通し間軸を獲得し、目の前の状況・場面がどの段階にあるかという時間的アスペクトを表すことが可能であるが、「白い」が使えない理由にもなり得る。

(16)いままスーパーマーケットの中を歩き回りながら、コメだけでなく棚のすべての食料がからっぽになる(白々とした/*非常に白い)光景を、ある種の緊張感とともに幻視することがある。

(NLT)

(16)は目の前の不明瞭な状況に基づき、話者が精神的・感情的な緊張、または不安の心理状態を表すと考えられる意味拡張の一例である。つまり、「白々」の意味は一般的に外界の物理的な対象の特徴から捉えられるのではなく、話者がその場の状況から自分の感覚・イメージを通して作り上げ、それを具体的な環境に反映させていると考えられる。

最後に、コーパスの用例から「白々しい」はどのように意味拡張が行われているかを見てみる。まず、「白々」と同様に、「白々しい」も視覚を通じ、「笑顔、無表情、顔、男…」などのような人間の外見・様子を描写することが可能である。または、人間の感覚・心理状態を表す「気持ち、虚無感、感じ」などの名詞にも共起することが可能である。その他に、「白々しい」は「白々」と異なり、(17)と(18)のように人間の言動・行為を表す「言葉、嘘、言い訳、内容」などの名詞と共起することが可能である。

(17)切実な問題につきあたるたびにのまされる苦汁は、いつも白々しい嘘やずるい黙殺や問題のすりかえであることは、だれでも経験しているところである。

(NLT)

(18)政策失敗や不祥事でも責任を取らず、誰の目にも明らかなほど白々しい内容で言い訳する官僚。

(NLT)

(17)の「白々しい嘘」と(18)の「白々しい内容」は現実に存在しない出来事の状況に対し、誰にでもマイナスイメージを伝えることができる表現である。山梨(2000)では、外部世界の理解には、具体的な解釈レベルからより抽象的な解釈のレベル(あるいは、特定の解釈のレベルからより一般的な解釈のレベル)にいたるまで様々な認知プロセスがかかわっている。つまり、「白々しい」には視覚に基づく<何もない>という状況から、<その時に感じる緊張、無関心などのような気持ち>という話者の感情にかかわっているに限られない。社会的・文化的観点からの動機付け<マイナスイメージ・好ましくない認識>が埋め込まれた背景として存在することが捉えられる。

以上の考察から、「白々しい」の意味を表す認知プロセスは、視覚を通じて得られる「白」と「白い」に関し、話者が何もないといった目の前の状況を、視覚を通じてある感覚・イメージを作り上げる。その後、視覚を背景化し、外部世界の主体的な解釈と意味づけ、環境・社会で一般化される共通認識が生み出される(表3を参照)。

表3 「白々しい」の意味拡張及び認知プロセス

視覚（目の前の状況）から人間の感覚・イメージを作り上げ、さらに社会による共通認識		
I（何も無い）目の前の状況	II その時に話者の感情・言動 ex. 白々しい気持ち、白々しい答弁...	III マイナスイメージ・社会一般化される好ましくない認識 ex. 白々しい嘘、白々しい内容、白々しい言い訳...

4. まとめ

本稿では、視覚で認知された事物の外見を描写する典型的な表現として「色彩語」を対象に、疊語「白々」と反復形容詞「白々しい」と同じ語基を持つ「白」、「白い」との意味拡張を分析した。具体的に、「白々」と「白々しい」は視覚による「白」、「白い」を持つ意味を拡張したプロセスが行われ、視覚によって認識できる色彩というより抽象的な感覚領域によって表されている可能性が明らかになった。

また、山梨(2000)が主張した認知プロセスを用い、視覚を通して「白」の表現が文中においてどのような意味変化を遂げ、どのようなイメージを作り上げていくのかを明らかにした。作られたイメージは他の語と共起することによって、新たな意味に拡張していく。こうして主体が外界を知覚・理解していく認知のプロセスを介し、「白」、「白い」から「白々」へ、さらに「白々」から「白々しい」と、それぞれ意味が結びつくとともに、意味用法が拡張していくと考えられる。

考察及び分析の結果は以下の3点にまとめられる。

- ① 「白」と「白い」は主に「視覚」と「一般認識」を通じて、2つの意味を表す語である。
- ② 「白々」の意味は一般的に外界の物理的な対象の特徴から捉えずに、その場の状況(視覚)から人間の感覚・イメージを作り上げ、他の対象に拡張していると考えられる。
- ③ 「白々しい」の意味は話者が(何も無い)目の前の状況を視覚を通じ、その時に話者がある感覚・イメージを作り上げ、社会で一般化される共通認識に拡張していく認知プロセスを通して生み出される。

表4 意味拡張及び認知プロセス

表現語	視覚		時間	視覚からある状況による		社会による共通認識
	具体物	抽象物		外見描写	内面描写	
白・白い	○	○	×	×	×	×
白々	○	×	○	○	○	×
白々しい	×	×	×	○	○	○

本稿では、日本語の色彩語である「白・白い・白々・白々しい」を対象とし、「語彙的反復表現」の意味拡張及び認知プロセスを明らかにするための、1つの研究方法を提案した。今回の考察・分析方法が他の色彩語にも同様の解釈ができるかは、今後の研究課題としたい。

参考文献

- 秋元美晴(2005)「複合語」日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店,pp.241-243.
 荒川洋平(2006)「認知意味論に基づく重複形容詞の分析」『高見澤孟先生古希記念論文集』凡人社,pp.71-91.
 飯田寿子(2005)「形容詞性構成要素からなる重複形容詞について—構成要素の特質をめぐって—」『国語学研究』(44)「国語学研究」刊行会,pp.80-92.
 池上嘉彦(2003)「言語における<主観性>と<主観性>の指標(1)」『認知言語学論考』(3)ひつじ書房.
 池上嘉彦(2004)「言語における<主観性>と<主観性>の指標(2)」『認知言語学論考』(4)ひつじ書房.

- 石井正彦(2007)「畳語」飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺(編)『日本語学
研究事典』明治書院,p.171.
- 石川慎一郎(2017)「X々型畳語の構造・使用・意味特性：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いた
計量的調査」『統計数理研究所共同研究レポート』(373/374),pp.55-74.
- 禹吳穎(2015)「畳語の諸機能」『学習院大学人文科学論集』(24),pp.25-57.
- 小野尚之(2015)「構文的重複語形成—「女の子の子した」をめぐって—」『語彙意味論の新たな可能性
を探って』開拓社,pp.463-489.
- 坂本真樹・内海彰(2007)「色彩形容詞と名詞の相互作用による色彩形容詞メタファーの認知効果」『認知
科学』14(3)日本認知科学会,pp.380-397.
- 沢田奈保子(1992)「名詞の指定性と形容詞限定性,描写性について—色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要
因の分析から—」『言語研究』(102)日本言語学会,pp.1-16.
- 田村泰男(2006)「現代日本語の複合形容詞・派生形容詞・畳語形容詞について」『広島大学留学生センタ
ー紀要』(16)広島大学留学生センター,pp.13-20.
- 藤村逸子(2003)「色彩名詞と色彩形容詞の対立：新聞と文学のコーパスからわかること」『日本語学習辞
書編纂に向けた電子化コーパス利用におけるコロケーション研究 中間報告論文集』,pp.25-48.
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明(1998)「五感と空間認知の言語学—感性から見た言葉と意味」『Computer Today』(83),pp.18-27.
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』くろしお出版.

外国語文献

- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, Vol.1.1. Stanford: Stanford University Press.
- Hubel, David H. and Torsten N. Wiesel (1962) “Receptive Fields, Binocular Interaction and Functional Architecture
in the Cat’s Visual Cortex.” *Journal of Physiology* (160) pp.106-154.

参考辞書・辞典・使用コーパス

- 『筑波ウェブコーパス』(Tsukuba Web Corpus: TWC)
- 『日本語表現・文型事典』(2002)朝倉書店.
- 『日本国語大辞典 第二版』(2000-2002)小学館国語辞典編集部編,小学館.